

本棚



原爆供養塔

—忘れられた遺骨の70年—

堀川恵子 著



1945年8月6日午前8時15分。かつて人類が経験したことのない“絶対悪”が広島に放たれ、一瞬のうちに人々の“いのち”を奪った。今年、オバマ米大統領が広島を訪問し、核兵器なき世界を追求する重要性を訴えたが、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）は演説の内容

について疑問を呈している。オバマ米大統領が「空から死が降ってきて世界が一変した」と述べたことについて、「あたかも自然現象のような言葉で、米国の責任を回避する表現だった」と指摘している。このように、核兵器の問題は世界において重要な課題となっており、唯一の被爆国として日本は核兵器なき世界、平和を訴えていく必要がある。しかし、広島や長崎で被爆した人々は年々減り、あの日に起こった事実、情景を伝える人々が少なくなっている。現実には、いまを生きる人々はその日のことを過去のことで考え、忘れかけている。本書は、被爆者の方々への取材から、その方々の“声”をもとに、あの原爆投下の日のこと、その後の被爆者の苦しみ、遺族の気持ちを鮮明に描いている。そして、読者に原爆で起こった事実を伝え、平和のあり方を考えさせる構成となっている。

序章では平和大通り、平和大橋、平和マラソンなど“平和”の二文字に溢れている広島から70年前に無念のまま町のあちこちで燃やし尽くされた死者たちの声が消

えてしまったことを読者に納得させる。これまで語られることのなかった、もうひとつのヒロシマ。原爆供養塔、そこに眠る死者たちの物語を始めたい、と締めくくられ、私たちが本書へと引き込んでいく。そして、この話は原爆により亡くなり、いまだ帰場所がない死者たちが眠る場所、原爆供養塔を中心に展開される。

第一章は原爆により人の死が死として扱われない町で、野ざらしにされた死者たちの供養に努める一人の僧侶が尽力し、無縁仏の供養のために供養塔を建てるまでの足跡が書かれている。しかし、この章の最後に僧侶は死を迎えるため次章からは、供養塔を一人で守り抜いた“佐伯敏子さん”を取り巻く話を中心となる。25歳で被爆した佐伯さんは原爆供養塔に毎日通い、遺骨の引き取り手を探す旅を続ける。その後、この旅は作者に引き継がれ、多くの被爆者の“声”を伝えるきっかけとなっている。また、佐伯さんは原爆ドームを訪れた修学旅行生などにも原爆の恐ろしさを語り、伝えた。この章からは、原爆で亡くなった遺族の想いや言葉で伝える大切さを感じさせられる。

第三章では、私の心に深く刺さった言葉があるため紹介する。『自分はなぜ、あの時、戦争に反対しなかったのだろう。・・・なぜ、戦争とは、人が人を殺すことだと気づかなかったのだろう』この言葉は佐伯さんの後悔の言葉として書かれているが、その言葉には現代を生きる人々が平和を考えるうえで、最も大切なことを伝えてくれているように思えた。

これは終章でも、法話をもとに伝えられている。当たり前のことを見失って起きるのが戦争。迷った時にはいつも原点に戻る、それを続けるしかない。広島は紛れもなく、昭和20年8月6日。歴史は生き残った者たちの言葉で語られるが、戦争の最大の犠牲者は言葉を持たぬ死者たちであり、私たちはその死者に向き合う必要があるのだと、忘れていた平和を考えるための道しるべを与えてくれる。そのため、戦争や原爆を経験していない現代を生きるすべての人々に“平和”を考えるきっかけとして読んでいただきたい一冊である。

(宮野優希 東京理科大学薬学部)

(ISBN978-4-16-390269-2, 四六判 360頁, 定価本体1,750円, 文藝春秋, ☎03-3265-1211, 2015年)

★「会員マイページ」のご案内★

- URL は <https://jrm.jrias.or.jp/mypage/login/login>
- ログインしていただくと、ご自身の会員情報の確認・更新ができます。「Isotope News」や「RADIOISOTOPES」の記事の閲覧も可能です。

